五高新聞
１９４号
１月１４日（木曜日）

巡り巡る幸せ

令和二年度 赤い羽根共同募金

二〇二〇年十二月七日（月）放課後。三尾野町の福江福祉センターで赤い羽根共同募金として集められたお金が受け渡された。五島高校を代表して、二年会計委員長の野原輝理（のはらきり）さんが、五島市社会福祉協議会会長の窄善明（さくよしあき）さんに手渡した。

五島高校の募金活動で集まったお金が手渡された。集まった金額は計四万二千五百三十四円にも。これほどまでの大きな金額が集まったのは、五高生全員の協力の賜物だ。

笑顔で受けとる窄さん（左）と緊張した様子の野原さん（右）

▽

窄さんにいくつかの質問をさせていただいた。まず始めに、なぜ赤い羽根共同募金をしているのか、である。「生活に苦しい人や助けを必要としている人のため」であるとおっしゃった。赤い羽根を配る理由は、「赤い羽根共同募金に参加してくれた証です」ということだ。また赤い羽根について、「赤い羽根を付けることにより街づくりに協力しているというPRになります。現在はお店にも飾っていただいているんです。だから見える場所、例えば帽子等に付けていただきたいです。現在はステッカーもありますので、はがれやすいなぁと思われる方は是非、そちらを付けてみてください」と話された。赤い羽根共同募金で集まったお金は運営委員会に連絡をして、対象となっている方々にお渡しする金額を教えてもらい、実際にそこを訪れて手渡しをしているそうだ。

学生も募金に参加する意義について訊ねてみたところ、「助け合う心を知ることができ、また小さいころからボランティアをしていると、大きくなったときにボランティアをしやすくなると思います。それに募金というのは、私たちが暮らしている場所に再び返ってくるものです。つまり、募金を行ったら循環して自分に返ってくる、ということなんです。」と教えてくださった。

▽

最後に五高生へ、「これから少子高齢化が進みます。どうしても体の弱い人が出てくるということです。だから、苦しんでいる人や大変そうな人を見つけたら、手を差し伸べる心を持ってほしいです。」とおっしゃった。

今まで募金活動を何気なく行ってきたが、集まったお金はどこでどのように使われているのかなど、知らないことばかりであると気づいた。これからの募金活動では、私たちの小さな募金が誰かの役に立っているのだと思いながら取り組んでいきたい。

発行所　五島高校
発行責任　五島高校新聞部
編集　森憩

五高新聞からのお知らせ

五島高校新聞部は現在二年生一名で活動しています。国語が苦手でも大丈夫です。是非、一緒に新聞を作りませんか？水曜日と木曜日に活動しています。興味のある人は二年生の新聞部まで！

『カエル先生』の熱意

人生の達人セミナー『故郷の自然を知ろう―五島市の生き物たち―』という演題で、二〇二〇年十一月十日（火）、長崎女子短期大学の松尾公則（まつおたかのり）先生が五島高校で講演した。

”カエル先生”という愛称で呼ばれる松尾先生は、その名前のとおりカエル好きであり、胸元にカエル柄のネクタイを付けて登場された。また会話の端々から生き物が好きだという気持ちがあふれ出ていた。

「長崎県の五島列島は歴史もすごいけど自然もすごい！」と前置きした上で、そもそも長崎自体が素晴らしい場所なのであると松尾先生は熱弁する。長崎という土地の特徴は沖縄を除いた日本の西端でユーラシア大陸に近く、また江戸時代には港が開かれていたこと。だから本土には生息していない珍しい生き物が沢山いるということらしい。

カエルを見る五高生と先生方

■何も知らないということの恐怖

松尾先生は次のように語る。

「困ることは、何も知らないこと。知らないうちにどんどん生き物がいなくなっていくのはとても怖いことです。だから皆さんには、どんどん状況が悪くなっているということを知っていてほしいのです。」

■生徒代表のことば

今回、生徒代表の挨拶は生徒会長の野口市郎太（のぐちいちろうた）くんが行った。

「カジカガエルの声を虫の声と勘違いしていたので、実際にカジカガエルの声を聞いたときは驚きました。オタマジャクシが吸い付くということにも驚きました。自分達が五島にいる生物について周りの人たちに知らせて、外来種が島内に入るのを防ぐことで、生物の多様性を大切にしていきたいです。」と述べた野口くん。彼が言ったように、今日学んだことを忘れずに生き物を大切にしていきたい。

■幸せの青いアマガエル

講演終了後、松尾先生が連れてきたカエルと触れ合う時間が用意されており、多くの生徒・先生方がカエルとの触れ合いを楽しんでいた。中でも珍しかったのは「幸せを運ぶ青いアマガエル」だ。普通のカエルは緑色だが、突然変異により黄色の光を反射できないために青色に見えるカエルが生まれたのだそうだ。体長は約三センチメートルで、数年生きられるのは奇跡らしい。大変可愛らしく、見ているものを魅了していた。

城跡に思う（部説）

「アラブの春」という言葉を、現代社会で習った。テストのためだけに言葉を覚え、実際は理解をしていなかったのだと痛感したのは、二十一歳の青年がフランスの教会に押し入り、刃物で男女三人を殺害した記事を、最近見たからだ。

十年前の十二月十七日、強権政治を行っていたベンアリ大統領への市民の不満が爆発。抗議活動によりベンアリ大統領は国外へ脱出し、二〇一一年一月十四日、二十三年間にわたる強権政権は崩壊した。しかし事態は改善することはなく、失業率は革命前より悪化して十五％ほどにまで上昇している。

「十年経っても将来を描けないのがこの国だ。」と語るのは容疑者の友人。家族を楽にしたい一心で働いていた青年が、突如として人を襲う。強い意志を持ち、強い者へと立ち向かい革命を成し遂げることは歴史的なことだと思う。だが現実は甘くなく、幸せな生活とは簡単につかめないものなのだと思った。